

偏極トーリック多様体に対する 対数的Chow半安定性のある必要条件について

中村 聡 (東北大学)*

1. はじめに

$X \subset \mathbb{C}P^N$ を射影代数多様体, $D \subset X$ を因子とし, $\beta \in [0, 1]$ (cone angle) とする. 対数的Chow(半)安定性はこれらの組 (X, D, β) に対して定義される, 幾何学的不変式論的概念である. 導入された動機としては (1) 対数的K-安定性および Conical Kähler Einstein (一般に Conical constant scalar curvature) 計量の存在との関連 [1], (2) この組のモジュライ空間のコンパクト化 [3, 9] がある. 本講演では偏極トーリック多様体とトーリック因子との組に対して, 半安定性の必要条件を求める. さらに応用として, いくつかの具体例に対して, Conical Kähler Einstein 計量の存在との関係を見る.

2. 対数的チャウ半安定性

$X \subset \mathbb{P}(V)$ を n 次元, d 次の既約な射影代数多様体とする. このとき

$$Z_X := \{ (H_0, \dots, H_n) \in \mathbb{P}(V^*)^{n+1} \mid (\cap_{i=0}^n H_i) \cap X \neq \emptyset \}$$

は $\mathbb{P}(V^*)^{n+1}$ の超曲面で, その多重次数は (d, \dots, d) なので, Z_X で消える切断として, X の Chow 形式 $R_X \in (\text{Sym}^d V)^{\otimes(n+1)}$ が定数倍を除いて一意に定まる.

$(\text{Sym}^d V)^{\otimes(n+1)}$ には自然に $SL(V)$ が作用するが, その作用を $\alpha \in \mathbb{R}$ だけ捻ったもの (i.e. $(\exp(u), R_X) \mapsto \exp(\alpha u) \cdot R_X$) を作用させた Chow 形式を, $R_X^{(\alpha)}$ と書くことにする.

定義 2.1. ([3, 9] c.f.[1]) X は上の通りで, $D \subset X$ を d' 次の既約因子とし, $\beta \in [0, 1]$ とする.

$$R_X^{(2n)} \otimes R_D^{((1-\beta)(n+1))} \in (\text{Sym}^d V)^{\otimes(n+1)} \otimes (\text{Sym}^{d'} V)^{\otimes n}$$

の $SL(V)$ -軌道の閉包が原点を含まないとき, (X, D, β) は対数的Chow半安定という.

また, 偏極多様体 (X, L) とその因子 D に対しては, L^i による小平埋め込み $D \subset X \subset \mathbb{P}(H^0(X, L^i)^*)$ を通して, (X, D, L^i, β) の対数的Chow半安定性を定義する.

注意 2.2. (1) $\beta = 1$ のときは, Mumford が定義した射影代数多様体の Chow 半安定性 [4] である.

(2) 作用のウェイト比を $2n : (1-\beta)(n+1)$ と取ると, 対数的Chow半安定性から対数的K-半安定性(説明しない)が従う.

(3) 異なる既約因子の和 $\sum_p (1-\beta_p) D_p$ に対しては, $\otimes_p R_{D_p}^{((1-\beta_p)(n+1))}$ を考えることで半安定性を定義する.

2010 Mathematics Subject Classification: Primary 53C56; Secondary 14L24.

キーワード: Toric manifolds, Log Chow semistability, Log K-semistability, Conical Kähler Einstein metric.

* 〒980-8578 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6番3号 東北大学 大学院理学研究科
e-mail: sb3m25@math.tohoku.ac.jp

3. 偏極トーリック多様体の場合の必要条件

Delzant 多面体 $P \subset \mathbb{R}^n$ と n 次元偏極トーリック多様体 (X_P, L_P) とが一一に対応することが知られている。また、拡大 iP には、 (X_P, L_P^i) が対応する。具体的には、 $\{iP \cap \mathbb{Z}^n\} \cong \{P \cap (\mathbb{Z}/i)^n\} := \{a_{i,1}, \dots, a_{i,N_i}\}$ のときに、 X_P の L_P^i による小平埋め込みの像は以下のようなになる：

$$\text{closure of } \{ [t^{a_{i,1}} : \dots : t^{a_{i,N_i}}] \mid t \in (\mathbb{C}^*)^n \} \subset \mathbb{P}(\mathbb{C}^{N_i}).$$

さらに、1つの辺 $F \subset P$ にはトーリック多様体が持つ $(\mathbb{C}^*)^n$ 作用で不変な既約因子 (トーリック因子) D_F が対応する。具体的には、

$$\left\{ [u_{a_{i,1}} : \dots : u_{a_{i,N_i}}] \in X_P \mid u_k \equiv 0 \text{ iff } a_k \notin F \cap (\mathbb{Z}/i)^n \right\}.$$

本講演の主結果は (X_P, D_F, L_P^i, β) の対数的 Chow 半安定性の1つの必要条件を、多面体 P の情報で記述したものである。

定理 3.1. (X_P, D_F, L_P^i, β) が対数的 Chow 半安定性ならば、

$$\#\{P \cap (\mathbb{Z}/i)^n\} \left(2i \int_P g_\varphi d\nu + (1-\beta) \int_F g_\varphi d\sigma \right) \geq \left(2i \text{Vol}(P) + (1-\beta) \text{Vol}(F) \right) \sum_{a \in P \cap (\mathbb{Z}/i)^n} g_\varphi(a).$$

が任意 $g_\varphi \in \text{PL}(P, i)$ に対して成り立つ。ここで、 g_φ は $\varphi : P \cap (\mathbb{Z}/i)^n \rightarrow \mathbb{Z}$ から “標準的に” 定まる、区分的線型な凹関数であり、 $d\nu$ は \mathbb{R}^n の Euclid 体積形式である。 $d\sigma$ は次で定まる ∂P の体積形式である： F を $\{h_F(\vec{x}) = c_F\}$ と表すとき、 $dh_F \wedge d\sigma = d\nu$ 。

注意 3.2.

$$T_{P,i} := \left\{ (t_1, \dots, t_{N_i-1}, (t_1 \cdots t_{N_i-1})^{-1}) \mid (t_1, \dots, t_{N_i-1}) \in (\mathbb{C}^*)^{N_i-1} \right\} \cong (\mathbb{C}^*)^{N_i-1}$$

は $SL(\mathbb{C}^{N_i})$ の極大代数トーラスである。実は、定理 3.1 の結論は、 $R_{X_P}^{(2n)} \otimes R_{D_F}^{((1-\beta)(n+1))}$ の $T_{P,i}$ -軌道の閉包が原点を含まないことと同値である。幾何学的不変式論の一般論 (例えば [5]) により、 $SL(\mathbb{C}^{N_i})$ -軌道の閉包が原点を含まない (つまり半安定) ならば、極大代数トーラスに関する軌道の閉包も原点を含まないことが知られている。

系 3.3. (X_P, D_F, L_P^i, β) が対数的 Chow 半安定性ならば、

$$\#\{P \cap (\mathbb{Z}/i)^n\} \left(2i \int_P \vec{x} d\nu + (1-\beta) \int_F \vec{x} d\sigma \right) = \left(2i \text{Vol}(P) + (1-\beta) \text{Vol}(F) \right) \sum_{\vec{a} \in P \cap (\mathbb{Z}/i)^n} \vec{a}.$$

注意 3.4. $\beta = 1$ の場合、定理 3.1 と系 3.3 は小野 [6, 7] の結果と一致する。

4. Conical Kähler Einstein 計量の存在との関係

カレントの等式 $\text{Ric}(\omega) = \beta\omega + (1-\beta)[D]$ をみたす X の Kähler カレント ω を、 D に沿って cone angle $2\pi\beta$ をもつ Conical Kähler Einstein 計量という。Conical KE 計量の存在から対数的 K-(半)安定性が従うことが知られている。そこで、注意 2.2.(2) から、「Conical KE から対数的 Chow 半安定性が従うか？」という問いは自然である。

例 4.1. $(\mathbb{C}P^1, \mathcal{O}(i), (1-\beta_0)[0] + (1-\beta_\infty)[\infty])$

この場合、系 3.3 の (LHS) - (RHS) = $\frac{1}{2}(i+1)(\beta_0 - \beta_\infty)$ となり、半安定ならば $\beta_0 = \beta_\infty$ が成立。これは Conical KE 計量が存在するための必要十分条件である。

例 4.2. $(X = \mathbb{C}P^2 \# \overline{\mathbb{C}P^2}, L^i = K_X^{-i}, D = (1 - \frac{13}{14})D_1 + (1 - \frac{13}{14})D_2 + (1 - \frac{5}{7})D_\infty)$

ここで、 X を $\mathbb{C}P^1$ 上の $\mathbb{C}P^1$ 束と見ると、 D_1, D_2 は $0, \infty \in \mathbb{C}P^1$ のファイバーで、 D_∞ は ∞ -切断である。このとき、 $\text{Ric}(\omega) = \frac{6}{7}\omega + (1 - \frac{6}{7})[\frac{1}{1-\frac{6}{7}}D]$ をみたすConical KE計量が存在する[8]。しかしこの場合、系 3.3の(LHS) - (RHS) = $(\frac{21}{10}i - \frac{5}{35})(1, 1)^T$ となり、半安定でない。これは高次二木不変量 [2] に相当する障害が影響していると思われる。

参考文献

- [1] S. K. Donaldson, *Discussion of the Kähler-Einstein problem*, notes on available on <http://www2.imperial.ac.uk/skdona/>.
- [2] A. Futaki, *Asymptotic Chow semi-stability and integral invariants*, Internat. J. Math. 15 (2004), no. 9, 967-979.
- [3] J. Li, X. Wang, *Hilbert-Mumford criterion for nodal curves*, Compos. Math. 151 (2015), no. 11, 2076-2130.
- [4] D. Mumford, *Stability of projective varieties*, Enseign. Math. (2), 23, (1977), 39-110.
- [5] D. Mumford, J. Fogarty and F. Kirwan, *Geometric Invariant Theory, Third edition*, Ergrb. Math. Grenstein. (2), 34, Springer-Verlag, Berlin, 1994.
- [6] H. Ono, *A necessary condition for Chow semistability of polarized toric manifolds*, J. Math. Soc. Japan, 63 (2011), 1377-1389.
- [7] H. Ono, *Algebraic-geometric semistability of polarized toric manifolds*, Asian J. Math, 17 (2013), 609-616.
- [8] J. Song and X. Wang, *The greatest Ricci lower bound, conical Einstein metrics and Chern number inequality*, Geom. Topol. 20 (2016), no. 1, 49-102.
- [9] X. Wang and C. Xu, *Nonexistence of asymptotic GIT compactification*, Duke Math. J. 163 (2014), no. 12, 2217-2241.